

## I. 公開シンポジウム

### 特集：アメリカの光と影——多文化主義をめぐる

立教大学アメリカ研究所は、その活動の重要な一環として、毎年連続シンポジウムや公開講演会を開催してきている。1996年度は、昨今のアメリカの文化情勢をふまえて、「アメリカの光と影」と題し人種・ジェンダー・階級の問題を中心に、アメリカ合衆国の過去と現在を考える公開シンポジウムを主催した。

ルネッサンス以降の近代が「自由・平等・博愛」の精神のもとに、社会の富を蓄積し、相対的に人間の生活を向上させることに成功してきたということは、多くの人が無理なく認めていることだろう。また、そのことと関連して、人類が博愛に結びつく人間主義、平等に結びつく民主主義、自由に結びつく自己実現を目指し、まがりなりにもそうした普遍的理想をこの世にうちたてんと努力してきた過程についても、否定的な態度をとるひとは決して多くはないと思う。しかし、他方で、人類がこの世にうちたてんと努力してきた「普遍的理想」を声高に叫び、それを長期にわたって独占的に享受してきたのが、ヨーロッパ系の白人たち、しかもそれがほぼ男性に限られてきたという非難も、現在では広く行き渡っている。言うなれば、近代という時代の中であって、周縁化されたり、他者化されたり、あるいは沈黙を強いられたり、見えなくさせられたりしてきたものの存在に、新たな光が当てられ始めたというべきだろう。

こうした近代に根ざす構造的な矛盾を最もよくあらわしているのが、今日のアメリカ社会の実状だろう。ある意味で言えば、国民国家としての壮大な近代の実験が、二十一世紀を目前にした現在、プラスとマイナスの評価をめぐる互いに激しくせめぎあっていると看してもよい。一方でアメリカ社会の主流を形成してきたヨーロッパ系白人が、「アメリカ」の凝集力に信を置き中流意識と社会の安定を前面にもちだしてくるとすれば、他方でネイティブ・アメリカンや黒人さらにはアジア系移民や女性たちが、それぞれの立場からそれぞれの独自性を主張しているわけである。

おそらく、今の段階では、誰にもまだ断定的な見通しをもつことはできないだ

ろう。しかし、問題の所在がどこにあり、それがこの先どのように推移していくかは、注意深く見守っていく必要がある。その意味で、立教大学アメリカ研究所は現在のアメリカをめぐる展開されているこうした問題に焦点を合わせるべく、「多文化主義」という言葉で語られている事柄の本質を様々な角度から考えてみることにした。

講師としては、こうした方面で早くから発言を繰り返している三人の方々においでいただくことができた。当日は、二百余名収容の大教室に立ち見の参加者がでる盛況で、約四時間にわたって熱気のこもった報告と質疑応答がおこなわれた。以下に掲載するものは、このシンポジウムの基調報告をしていただいた三人の方々にご寄稿を仰いだ結果である。当日の報告をそのまま文章化していただいたものもあるし、あらたに稿を起こしていただいたものもある。シンポジウム当日は、越智道雄氏に、現代のアメリカの状況を踏まえて「多文化主義」について概括的な問題提起を行っていただいた。荒このみ氏には、文化論の立場から、一・二の具体例をあげながら問題を敷衍していただいた。また、野村達朗氏には、歴史的な立場から、前二者の問題提議を踏まえて総括的に問題をまとめていただいた。そこから生まれた成果がこのような形になったことを喜ぶたい。

(小 林 憲 二)